



八窓庵と白く光る露地

札幌によみがえった八窓庵
 都心にありながら豊かな緑に囲まれ、市民の憩いの場となっている中島公園。その中にある日本庭園では、深い木立に包まれ、ひっそりと立つ木造の建物が、森閑とした雰囲気さをさらに引き立たせている。その建物が八窓庵（旧舎那院忘筌）と呼ばれる茶室であり、およそ四百年前に活躍した大名茶人小堀遠州の晩年の作と伝えられている。



茶室の内部（非公開）

もともと、八窓庵は遠州の居城であった近江国（滋賀県）小室城内にあったものだが、流転の末、遠く離れた札幌にたどり着くことになった。発端は、天明八年（一七八八）に小堀家が藩財政の悪化と失政を理由に国替えを命じられたことだった。この時、小堀家に代々伝わる貴重な財産が散逸してしまい、八窓庵も滋賀県の長浜八幡宮俊蔵院へ移されることとなった。その後、一特別な場所へ、さらに明治初頭には俊蔵院の学頭（大寺院で学事を統括する所）である舎那院へ移築された。大正八年になって、それを言論人でもあった実業家の持田謹也氏が買い取り、札幌の自宅（北四条西一二丁目）へ持ち帰ったのである。持田氏は千葉出身で、明治二十九年に北海道毎日新聞

の編集長として来道し、三十九年には北海道タイムス（現在の北海道新聞）の編集長、さらには取締役となった人物である。

一札幌に息づく大名茶人の遺産

八窓庵と小堀遠州



正面に掲げられた扁額「忘筌」。筌とは竹を編んで作った魚を捕る道具で、荘子の句で「魚を得て筌を忘る」とある。理を悟って教えを忘れるという意味。遠州の直筆といわれている。

また、かつて中島公園にあった競馬場を私費を投じて改修したり、日本競馬会の理事を務めたりするなど、競馬の奨励にも力を入れ、札幌競馬の育ての親ともいわれている。その後、八窓庵の所有者は持田氏から実業家の長沢元清氏に変わり、昭和四十六年には長沢氏から札幌市に寄付され、現在の場所へ移されることとなった。移築の際は、建物ごと掘り起し、巨大な特製台車に乗せて深夜に六時間かけて運んだという。こうして、持田氏にとっては競馬の思い出の地でもある中島公園に、江戸時代初期の貴重な遺構がよみがえったのである。

八窓庵を囲む緑の静寂

中島公園の日本庭園

八窓庵が立つ日本庭園も趣深い。造営に当たっては北海道の山野の色を念頭に置いたという。庭石は日高の沙流川、胆振の鶴川の源流などから運んだもので、池の護岸にはセメントを一切使わず、古来の名園を参考に石と丸太で組まれた。十二基の石灯ろうは京都の老舗石屋が全国各地の名だたる灯ろうの形をそそえたものである。

日本庭園の開園時間 午前6時～午後7時（4月下旬～11月上旬）

